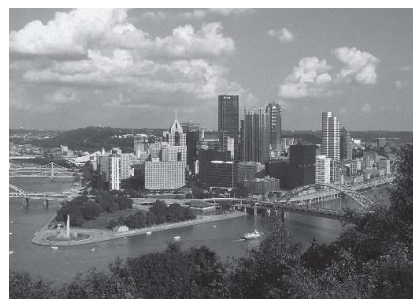


ピッツバーグ留学体験記

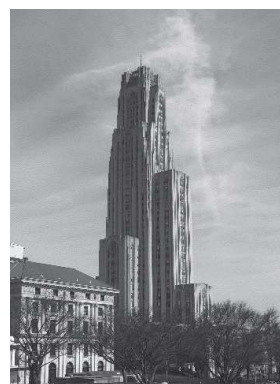
Starzl Transplantation Institute

佐々木 一樹（平成 21 年卒）

肝胆膵移植グループの佐々木一樹です。私は、2017 年 10 月より 2020 年 3 月までピッツバーグ大学に留学しました。ピッツバーグは Pennsylvania 州の西側で、Allegheny 川と Monongahela 川が合流する三角地帯に位置します。ピッツバーグ大学には「学びの聖堂 (Cathedral of Learning)」と呼ばれる高さ 163m の塔があり、大学のシンボルとなっています。私の勤務していた Starzl Transplantation Institution は移植研究が盛んに行われ、移植の父とされる Thomas E. Starzl がその名前の由来となっています。



私はもともと臓器移植に興味があり、大学院では、肝組織の三次元構築のテーマに取り組みました。師事しておりました Angus W. Thomson 先生は移植免疫がご専門で、私は Non Human Primate の腎移植モデルを用いて制御性 T 細胞 (Treg) の輸注による免疫寛容誘導の研究に従事させて頂きました。腎移植の手術は、UPMC の腹部移植外科チーフの Abhinav Humar 先生を中心とする移植チームが行い、私は Treg の培養、解析を担当しました。私自身、免疫の研究に従事するのは初めてでしたが、ここで移植免疫を学ばせて頂いたことは、将来的に移植医療に取り組む上で大変意義のあることであったと考えています。



海外留学を考えている若い先生へのメッセージとしては、ぜひ留学してみることをお勧めします。留学先を探すところから、現地での生活の立ち上げ、現地の人との英語でのコミュニケーションなど全てが貴重な経験になります。留学先を選ぶ方法には、知り合いの先生に紹介して頂く、前任者の後任としていく、自分で探す、の 3 通りがあると思います。私の場合は、肝臓、移植、再生をキーワードに、有給で 2 年～2 年半を条件に研究室を探しました。ただ、留学先を選ぶにあたって、いくら前情報を得ていても、実際に行ってみないとわからないことが沢山ある（研究テーマ、研究設備、ボス・ラボメンバーとの相性など）ので、確実な方法はないと思います。こういう私も一度ラボの変更を経験しましたが、変更後のラボでは、ボスや同僚、周囲の環境に恵まれ、無事に研究結果を学会発表・論文発表の形でまとめることができました。

最後に留学の機会を与えて下さいました土岐祐一郎教授、森正樹教授、江口英利教授、明石満教授にお礼を申し上げます。

